

1. 家政学の社会的評価を高めるための手段、方法を見出だそうとする。

2. 他の領域の諸学との比較において家政学の性格、本質を考える（もっぱら机上の作業として）。

3. 大熊信行氏は、「家政学会は他に類がないほど大きな学会に発展しつつあるにもかかわらず、現在全国婦人会議の指導者やマスコミ関係の指導助言者に家政学者が除外されている」事実を指摘している。

数年の長きにわたって展開された「主婦論争」においても、家政学の立場からこれに参加している学者は極めて少ない。「主婦」の性格、「主婦の地位およびその向上の問題は家政学にとって極めて重要な目標の1つと考えられるにもかかわらず、主婦論争に家政学者の積極的発言が見られなかったのは、現在の家政学が食物・被服の技術に重点を置き、最終目的である家庭の幸福がその背後にかくれてしまっていて明瞭には意識されていなかったためであるとはいえないであろうか（また家政学者の多くは実験技術は優れているが社会的視野に立っての発言はあまり得意でないという傾向も一つの原因である）。

家政学が正当な社会的評価を獲得するためには、家族関係を中核として家庭の構造・性格・機能等についての精細な調査ないし実験のデータが必要であり、その上に食物・被服の領域が加えられるべきであろう。